

漢文笑話『訳準開口新語』について

磯 部 祐 子

1：はじめに—「漢文小説」の出版と漢文笑話—

最近、「漢文小説」ということばを耳にすることがある。それは、中国の文語体の文章に倣い、日本・越南・朝鮮朝などで記された漢字散文体の文学作品を指し、具体的には虚構の小説および随筆紀行文、笑話などの内容を含む。このような意味規定は、「漢文小説」研究の必要性を実感したフランスの陳慶浩・台湾の王三慶両氏によってなされた。王三慶氏は、例えば日本漢文小説について、「表は中国の文字であるが、内に流れる日本人の意識形態と血液」である「漢文小説」が、「自国語で書かれていないため」にその国の文学において紹介されることは少なく、同時に「中国本土のものでないため読者層も少なかった」¹ため、漢文小説の存在と全体像が明らかにされてこなかった、という。この欠落を補おうと、やがて、両氏を中心とするプロジェクトが立ち上がり、越南・朝鮮半島・日本における漢文小説の蒐集と復刻の試みが始まった。

今日まで、彼らが関わった漢文小説の復刻出版には、『韓国漢文小説全集』（林明德編、中國文化學院出版部、民国69[1980]）、『越南漢文小説叢刊』（法國遠東學院出版、臺灣學生書局印行、1987）、『日本漢文小説叢刊』（王三慶・莊雅州・陳慶浩・内山知也主編、臺灣學生書局、2003）があり、その甲斐あってこれまで入手困難であった漢文小説が容易に目にできるようになり、その全体像を把握できる環境が少しずつ備わりつつある。しかし、研究は緒に就いたばかりであり、今後、その特徴、およびその国の文学における位置については更に考察していかなければならないと思われる。

台湾では、この出版を機に、日本漢文小説については、王三慶教授の指導の下、国立雲林科技大学の謝瑞隆が「日本近世漢文笑話集研究」（2005）と題する修士論文を提出している。新たな漢文笑話研究が開始されたといってよい。日本でも、王三慶氏らによる復刻と出版を受け、『日本漢文小説の世界—紹介と研究—』²が編まれた。

しかし、日本漢文小説は、日本文学の範疇であるものの、漢文読解が困難であるなどの理由により、日本文学研究者の立場から、その研究は些か難しいとの感想も聞く。

1 「《日本漢文小説叢刊》王序（中文）」（『日本漢文小説叢刊』（王三慶・莊雅州・陳慶浩・内山知也主編、臺灣學生書局、2003）参照。

2 日本漢文小説研究会編『日本漢文小説の世界—紹介と研究—』（日本漢文小説研究会、白帝社、2005）

小論は、このような動向に刺激を受け、まずは、『訳準開口新語』について、作者が笑話を作るに当たり依拠した話を渉獵し、ついでそれらが日本のその後の文学にどのような影響を与えたかについていささか考察した。

そもそも、漢文笑話は中国の『笑府』等の影響下に作られたといつてよい。この分野で最も多く優れた論考を発表した石崎又造は、「漢文の笑話なるものは、…全然創作に成るといふ様なものは極めて少なく、支那笑話の改作か或は民間の俗伝或は古笑話の翻案に過ぎないものが多い。又之等俗文學者の漢譯の態度を見ると、笑話を笑話として文學的に鑑賞したといふのではなく、…作文階梯といふ名目を假りて、所謂戲作的態度で臨んだのである。」³と述べる。石崎氏は、笑話を①中国笑話の改作、②民間の俗伝、③古笑話の翻案の3種に分類するが、小論は、これらに加えて④創作と見られる点を考慮する。また、同時に、笑話改作の特徴、「いわゆる戲作的態度」についての再検討も行う。これらの作業によって、漢文笑話の特徴もさらに明確になるとと思われる。

2：江戸における漢文笑話作品集

さて、漢文笑話を江戸の人々はどのように理解していただろうか。滑稽本（江戸後期を代表する俗文学）の作者であった式亭三馬の『浮世床』から、中国笑話への高い評価とともに、漢文笑話を中国笑話と看做していたことを看取できる。以下は、世の中のことにあまり通じていない田舎の漢学者（孔糞先生）と床屋の主人（鬢五郎）との対話である。⁴

孔「コレ主人、咄家とはどうしたものだ。」

びん「落話（オトシバナシ）をする手合さ。」

孔「ム、笑話か、笑話は漢（カラ）がおもしろい。山中一夕話の事を、開卷一笑ともいふが又格別だて、笑々道人が作ったものだ。また遊戯主人が笑林広記、和本にも岡白駒が訳した開口新語、あるひは笑府のたぐひ、イヤどうも漢は違ったものだて、あの趣向をきゃつ等に教へてやりたい。」

などと、いひたがるものなり。漢の話を日本に訳し、或は翻案してある事は知らず。こゝが村学究の持前なり。

びん「唐（カラ）にも落咄がありますかネ。」

孔「あるともあるとも日本のやうな事ではない、甚だ巧みなものだ。」

3 石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文學史』P321（弘文堂書房、1940）

4 松枝茂夫・武藤禎夫編『中国笑話選』（平凡社、1982）所収の松枝茂夫「解説」にも同様部分が引用されている。

漢文笑話『訳準開口新語』について

ここには、江戸中期において中国笑話が漢学者の間で話題に上っていたことが窺えると同時に、日本人の書いた『訳準開口新語』を中国作品の翻訳と誤解している小賢しい知識人のことばからは、インチキ漢文通への嘲笑と共に、漢文笑話『訳準開口新語』への評価をも窺うことができる。

それでは、今日、目にすることができる漢文笑話の作品集にはいかなるものがあるか、実見した作品および武藤禎夫「漢文体小咄本について」⁵⁾に基づき、その主たる項目について表にする。

書名	出版年	作者など	作品数 (話)	特徴	収録書など
訳準開口新語	寛延4年 (1751)	岡白駒記 播磨清絢序 風月堂庄左衛門刊	100	漢文笑話の祖。序に作文階梯が目的との記載あり。	『嘶本大系第20巻』所収 ⁶⁾ 『未翻刻江戸小咄本十一集』 ⁷⁾ 『日本漢文小説叢刊第一輯』所収
笑話出思録 (改題再版して開口笑話録)	宝暦5年 (1755)	乾篤軒編	42	艸喬先生の門人(38人の作者名がある。儒者と僧侶である。)半数近くに艸喬先生の評がある。	『未翻刻江戸小咄本八集』所収 ⁸⁾
鬼説新語	宝暦頃	岡白駒	65	全65の内、9話を除き、他は全て『訳準開口新語』と共通する。	写本 筑波大学図書館所蔵
翁媪緒餘	宝暦頃	日初禪師著 ⁹⁾	165	学僧の戯文の性格を有する。	写本 大阪府立図書館蔵(筆者は所蔵を確認できていない)
笑叢 ¹⁰⁾		澤田一斎著	?		所在不明
奇談一笑(巷談奇叢)	明和5年 (1768)	口木子(西田維則)著 岡白駒編集	26	民俗譚・伝聞類が多い。厳密には笑話といえない。卑俗。	『日本漢文小説叢刊第一輯』所収(刻本 天理大学所蔵本に拠る)

5 武藤禎夫「漢文体小咄本について」(『漢文体笑話ほん六種』所収, 近世風俗研究会, 1972) 参照。

6 武藤禎夫編(東京堂出版, 1979)

7 武藤禎夫編(近世風俗研究会, 1979)

8 武藤禎夫編(近世風俗研究会, 1968)

9 日初禪師については、伴蒿蹊・森銚三校註『近世畸人伝』(岩波文庫, 1940)に、その伝記「僧日初」が見える。

10 『笑叢』は、前掲『近世日本に於ける支那俗語文學史』においてその名が紹介されている。

書名	出版年	作者など	作品数 (話)	特徴	収録書など
前戯録	明和7年 (1770)	河邑先生著	13	童謡・戯文も付す。	『漢文体笑話ほん六種』所収
善謔随 訳	安永4年 (1775)	霊松道人著 義端上人選 (僧侶) ¹¹	64	説教教化が目的との記 載あり。	『喃本大系第20巻』所収 『漢文体笑話ほん六種』所 収
和漢咄 会	安永4年 (1775)	青木宇千輯	3	日本語（仮名と漢字交 じり）による笑話と漢 字による笑話がある。 漢文笑話は『訳準開口 新語』に基づく。	『喃本大系第17巻』所収
青眼餘 言	寛政6年 (1794)	世外放蕩居士 著	65	簡約は妙。	写本 国会図書館蔵
善謔随 訳続編	寛政10年 (1800)	霊松龍鱗庵義 端選（僧侶）	30	説教教化が目的との記 載あり。	『喃本大系第20巻』所収
笑門	寛政9年 (1797)	濱釣散人（舟 生釣濱）著	38	簡潔で「落ち」も明白。	版本 東北大学狩野文庫 蔵に拠る
胡廬百 轉	寛政9年 (1797)	河原澤著 太平館（畠中 観斎）序	66	中国の話に基づくもの が多い。	『漢文体笑話ほん六種』所 収
笑堂福 聚 ¹²	享和4年 (1804)	奚疑塾主人戯 著（山本北山 著）	52	風刺性が強い。	『漢文体笑話ほん六種』所 収
花間笑 語 ¹³	文化5年 (1808)	三村崑山 (三村其原) (1762-1825)	159 ¹⁴	作文階梯が目的との記 載あり。 全て先行小咄を利用。	(国会図書館蔵本 大阪大 学蔵本 大阪府立図書館 蔵本 無窮会増本 上田 市立図書館蔵本などある が、収録数は異なる。) 『国文学未翻刻資料集』 ¹⁵
解頤譚	文化10年 (1813)	亡斯先生批評 蓑谿罷癡子戯 著	49	佳話が多い。文章もよ い。	『漢文体笑話ほん六種』所 収（写本 斯道文庫蔵本 に拠る）

11 義端上人については、石濱純太郎著『浪華儒林伝』（全国書房、1942）に「義端上人と旭千里」があり、本書を「戯謔の小話を漢文に訳して文章の法を示したもの」と紹介している。

12 『笑堂福聚』に関しては、佐藤浩一「山本北山『笑堂福聚』について」（上掲『日本漢文小説の世界—紹介と研究—』所収）があり、作者と作品について言及されている。

13 『花間笑語』については、湯城吉信『『花間笑語』と江戸小咄との関係について』（『国文学年次別論文集 平成十五年版近世分冊』）に収録。初出：『大阪府立工業高等専門学校研究紀要』37号、2003年7月）がある。

14 初めての出版は1800年前後であると思われるが、ここでは大久保正編『国文学未翻刻資料集』（桜楓社、1981）に収める文化5年本に拠る。

15 注14に引く『国文学未翻刻資料集』（桜楓社、1981年）。

漢文笑話『訳準開口新語』について

書名	出版年	作者など	作品数 (話)	特徴	収録書など
肖山野録 ¹⁶	文政2年 (1819)	山梨稻川著	35	笑話以外に、怪談や儒 仏論・養生論などの文 章も含む。	天理大学蔵（藤井乙男旧 蔵本）
訳準笑話 ¹⁷	文政7年 (1824)	津阪東陽著	198	作文階梯が目的との記 載あり。 江戸小咄の漢訳も多 い。	『嘶本大系第20巻』所収
困譚 ¹⁸	文政7年 (1824)	蛸洲翁 寺崎 一貫著	41	よい文章である。	『嘶本大系第20巻』所収 『日本漢文小説叢刊第一 輯』所収
如是我聞 ¹⁹	天保初？ (1830年 代)	観益道人著 (僧侶)	77	内容は多岐に渡る。	『漢文体笑話ほん六種』所 収 『日本漢文小説叢刊第一 輯』所収
楓菌集	未詳（天 保頃？）	春山如菴述	27	当代のゴシップ的性格 の内容が多い。	『愚山雜稿』所収 ²⁰
奇談新編 ²¹	天保13年 (1842)	淡山子・紀洋 子共編	49	評語あり。既出話が 大半を占める。 長文のものがある。	『嘶本大系第20巻』所収 『日本漢文小説叢刊第一 輯』所収
寒燈夜話	大正4年	負山樵夫（広 田直三郎）著	47	世俗の奇談とフィク ション性に富むものが 多い。	『日本漢文小説叢刊第一 輯』所収（天理大学図書 館蔵本に拠る）

16 繁原央『山梨稻川と『肖山野録』』（麒麟社、2001年）参照。

17 竹内肇『『訳準笑話』管窺』（茨女国文10、1998年）、竹内肇『『訳準笑話』管窺補考』（茨女国文11、1999）は、『訳準笑話』の書誌と作者及び創作意図について考察したものである。

18 森銑三「困譚とその著者」（『森銑三著作集』10巻所収、中央公論社、1972年）において、作品とその著者について紹介されている。

19 関連論文に、月野文子『『如是我聞』にみえる儒者批判-漢文体「笑話」に描かれる儒者像とその権威の失墜-』（福岡女子大学近代日本研究会編『近代日本の精神形成史の研究』、2005）がある。

20 『隨筆百花苑 第5巻・学芸篇』（中央公論社、1982）所収。

21 『奇談新編』については、王国良『漢文笑話集『奇談新編』』（上掲『日本漢文小説の世界—紹介と研究—』所収）において、その価値と影響が考察されている。

その他（主に明治以後）、文明笑話（明治11年）、明治笑府（明治13年）、抱腹奇語（明治14年）、珍珍文鈔（明治14年）、明治開口新語（明治14年）、笑文選（明治14年）、解頤資談（昭和13年）等もある。

上記によって、30余の漢文笑話が江戸時代を中心に生まれていることが分かる。これら漢文笑話集は、1000ぐらいは存在するといわれる日本語による笑話集（軽口本、噺本）²²とは比較にならないほどの微々たる量であるが、漢文読解者の人口を考えれば、決して少なくない量であるともいえよう。

3：『訳準開口新語』の特徴

その中で、漢文笑話の嚆矢としての『訳準開口新語』について見てみたい。作者は、岡田白駒（1692-1767）、略して岡白駒²³といい、初めは京都に程近い摂津西宮で医を業としていたが、後に京に出て儒者を志し、古注疏を学び、詩経毛伝補義12巻、論語徴批1巻、史記鱸10巻、孟子解14巻、箋註蒙求校本などを著した。また、中国語も学び、白話文学に興味を抱き、『三言二拍』の中のいくつかの作品を『小説奇言』『小説精言』として編み、句読字解を施した。このように、古文と白話の両方に通じていた岡白駒が、沢田一斎（号一斎また奚疑斎。名重淵。字は文拱。）という書店主人（書店経営者としては風月庄左衛門と称する人物）と交わりを結び、出版を受け入れてもらったようである。そのため、岡白駒の著作の多くが風月堂版ということになった。

『訳準開口新語』²⁴は、寛延辛未（1751）年の序文をもつ袖珍本である。百話から成り、短い笑い話がほとんどあるが、後半になると物語性の濃厚な話も収められている。まず、以下に、百話の内容と個々の作品が他のいかなる物語と類似があり、どのような書籍からの引用であるかについて表にまとめる。尚、調査に当たっては、『江戸小咄辞典』（武藤禎夫編、東京堂出版、1965）、『江戸小咄類話事典』（武藤禎夫編、東京堂出版、1996）、『近世日本に於ける支那俗語文學史』（石崎又造著、清水弘文堂、1940）、『歴代笑話集』（王利器輯録、上海古籍出版社、1981）、湯城吉信『『花間笑語』と江戸小咄との関係について』（上掲注13参照）か

22 『噺本大系』全二十巻（武藤禎夫・岡雅彦編、1975）には、日本語による噺本が300集ほど収められているが、未収の作品も数多く存在する。また、武藤禎夫編『江戸小咄辞典』（東京堂出版、昭和40年）の「噺本概説」では「約1千種もの噺本が出版（ママ）された」と記される。

23 岡白駒の伝記に関しては、「京坂に於ける唐話通と俗文学（其一）」（石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文學史』弘文堂書房、1940）参照。

24 小論で引く『訳準開口新語』は、全て『噺本大系』（武藤禎夫・岡雅彦編、1975）本に拠る。但し、「笑府」等との比較を考慮し、「返り点」と「送りがな」を削除の後、筆者が句読点などを施した。

ら関連話を探し、『噺本大系』（武藤禎夫・岡雅彦編，東京堂出版，1975～），『元禄期軽口本集』（武藤禎夫校注，岩波文庫，2004），『安永期小咄本集』（武藤禎夫校注，岩波文庫，2004），『化政期落語本集』（武藤禎夫校注，岩波文庫，2004），『日本小咄集成』（浜田義一郎・武藤禎夫編，筑摩書房，1971），『昨日は今日の物語』（武藤禎夫訳，平凡社，東洋文庫，1967），『江戸小咄集1・2』（宮尾しげを編，平凡社・東洋文庫，1971），『全訳笑府（上）（下）』（松枝茂夫訳，岩波文庫，1983），『国文学未翻刻資料集』（大久保正編，桜楓社，1981）及び上掲の漢文笑話集から類似内容を探った。

3. 1) 『訳準開口新語』と他の作品との関係一覧

作品番号	内 容	日本の類似作品	中国の類似作品・引用句など
1	魏武（厳格な武帝にこと寄せて）	未見	（魏武）
2	入目	「醒睡笑・巻一鯉のはなし」（1628寛永5）「囃物語・鯉の目のはなし」（1680延宝8）「聞上手三編・眼玉」（1773安永2）落語「犬の目」	（華佗）
3	医者看板	「聞上手三篇・看板」（1773安永2）	
4	横柄な王孫（店越）	「新話笑眉・身は寒けれど口は大名」（1712正徳2）「高笑ひ・店越」（1776安永5）「笑の初り・店越」（1792寛政4）「おとぎばなし・店越」（1822文政5）	（王孫とは乞食と対比的に用いた中国的姓名）
5	不識字	無筆の話は多い	
6	碁 助言	「聞上手三篇・助言」（1773安永2）「金財布・掛将棋」（1779安永8）「軽口夜明烏・流石ハ浪人」（1783天明3）	『笑府』『細娛部・教棋』
7	算掛先生	「軽口御前男・まがひ道」（1703元禄16）「軽口機嫌囊・陰陽師身のうへ」（1728享保13）「春笑一刻・うらなひ」（1778安永7）	
8	海鼠と蟹	「春笑一刻・問答」（1778安永7）	
9	薬師と千手観音	未見	
10	捨て大黒	「軽口太平楽・巻4・捨て大黒」（1763宝暦13）「さとすずめ・大黒」（1777安永6）「落話花之家抄・大黒」（1778安永7）	

作品番号	内 容	日本の類似作品	中国の類似作品・引用句など
1 1	神をだます	「軽口初売買・仏のかをも三度」(1739元文4) 「聞童子・福守」(1775安永4)	
1 2	物忘れと意固地	「醒睡笑」(1628寛永5) 「百物語」(1659万治2) 「御伽草・頭巾」(1773安永2)	
1 3	酔の代わりに糊を買う(糊ならこぼれぬ)	「軽口御前男・子が才覚」(1703元禄16) 「軽口独狂言・丁稚の了簡違ひ」(1765明和2) 「新製欣欣雅話・文殊」(1799寛政11) 「花間笑語」(1800前後)	
1 4	火事(痴漢)	未見	
1 5	酒酔い閻魔	未見	
1 6	柱(毘盧殿)	「軽口機嫌囊・わが身つめつて人の」(1728享保13) 「聞上手三篇・柱穴」(1773安永2) 「詞葉の花・どらむすこ」(1797寛政9)	『詩経』「小雅蓼莪」 「哀哀父母 生我劬勞」
1 7	恐妻	「訳準笑話・有比隣並懼内者」(1824文政7) 「奇談新編」(1842天保13)	蘇軾詩「寄吳德仁兼簡陳季常」
1 8	寝坊(鴛鴦寺の和尚)	「軽口機嫌囊・水にうつる面影」(1728享保13) 「わらひ鯉・ねぼう」(1795寛政7) 「咄土産・女郎」(1824文政7) 落語「ぼうずの遊び」	『笑府』「殊稟部・解僧卒」 『広笑府』「財酒誤事」 『笑贊』「一和尚犯罪」 『応諧録』「僧在」
1 9	僧の大食	未見	『易経』「周易上経剝」 「剝床以足」
2 0	蛇含草	「一休関東咄・大しょくはなしの事」(1672寛文12) 「軽口てばこの玉・牡丹餅が大小」(1716・享保元) 「訳準笑話・有客行中野」(1824文政7) 落語「蛇含草」 民話・とろこし草	
2 1	両替	「軽口片頬笑・誰が気も同じ事」(1768明和5) 「和漢咄会」(1775安永4)	
2 2	イザリ	「新話笑眉・川越じゅれい」(1712正徳2) 「軽口手葉古の玉・座頭の川わたり」(1716享保元) 「軽口初笑・身をすててこそ浮かむ瀬」(1726享保11) 「軽口福徳利・くしだ川」(1752宝暦2) 「和漢咄会」(1775安永4) 「花間笑語」(1800年前後) 「木曾街道膝栗毛」(1814文化11)	『笑林広記』「擱浅」

漢文笑話『訳準開口新語』について

作品番号	内 容	日本の類似作品	中国の類似作品・引用句など
23	分け取り	「醒睡笑・そでない合点」(1628寛永5)「百登瓢覃・巻五(1701元禄14)「軽口福蔵主・わけどり」(1716正徳6)「民和新纂・盗人の寄合」(1781安永10)	
24	道学先生	未見	
25	座頭(犬の背の長さを知らず)	「楽牽頭・座頭」(1772明和9)「仕形咄・犬」(1774安永3)「解頤譚」(1813文化10)「甲子夜話」(1821年文政4)「訳準笑話・客説劇話」(1824文政7) 落語「景清」	『莊子』「逍遙遊篇」「不知其幾千里」
26	捕雀	民話「雀捕」 「鳩灌雑話・鷺」(1791寛政3)「善謔随訳続編・有捕鷺術」(1798寛政10)「困譚」(1824文政7)	
27	猿顔	民話「和尚と小僧」 「醒睡笑・貴人の行跡」(1628寛永5)「露鹿懸合咄・題猿」(1697元禄10)「軽口利益咄・猿」(1709宝永6)「近目貫・猿」(1773安永2)「仕形咄・猿」(1774安永3)「善謔随訳・有滑稽子」(1775安永4)「豊年俵百噺・猿」(1775安永4) 落語「猿ぼけ」	『醉翁談録』「嘲人面似猿猴」
28	茗荷宿 宿屋の悪知恵	民話「茗荷女房」 「かす市頓作・囊荷のつかひそこなひ」(1708宝永5)「聞上手二篇・茗荷」(1773安永2)「しみのすみか物語・人宿して物とらむとせる女の事」(1805文化2) 落語「茗荷宿」	
29	盗み酒	未見	
30	釜泥	「近目貫・大釜」(1773安永2)「新口花笑顔・盗人」(1775安永4「吟出川」の改題本)「春俗・盗人」(1777安永6)「気の葉・釜盗人」(1779安永8)「わらひ鯛・大釜」(1795寛政7) 落語「釜盗人」	
31	屈指	未見	
32	行灯(燈に躓く)	「軽口初笑・念の上にも念」(1726享保11)「千里の翅・あんどろ」(1773安永2)「訳準笑話・主人夜酔」(1824文政7)	

作品番号	内 容	日本の類似作品	中国の類似作品・引用句など
33	牛と馬	「鹿子餅・牛と馬」(1772明和9)	
34	釣(強がり)	「民和新繁・岡釣」(1781安永10)	
35	鯨	民話「闇夜の黒牛」 「軽口機嫌囊・ねこにからざけ」(1728享保13)「高笑ひ・画」(1776安永5)「福種笑門松・鯨」(黄表紙仕立て1790寛政2)「おとぎばなし・画工」(1822文政5)「訳準笑話・或製枕屏」(1824文政7)	
36	八坂饅頭(すれ違い)	「百物語」(1659万治2)	
37	貧乏神の嫉妬	「軽口御前男・貧報神かいちやう」(1703元禄16)「軽口若夷・びんぼう神開帳」(1742寛保2)「譚囊・貧乏神」(1772明和9)「按古於当世・貧乏神開帳」(1807文化4)	
38	愚かな思考：山茶花と水仙花	未見	
39	妓女の屁(香袋)	未見	
40	妻の足とわが足(粗忽な亭主)	「無事志有意・そそか」(1798寛政10)	
41	達磨	「聞上手三篇・達磨」(1773安永2)「茶呑友達・達磨」(1780安永9)「菊寿盃・達磨」(1782天明2)	
42	妓女の屁	「花間笑語」(1800前後)	中国に屁に関する笑話は多い。
43	屋根や	「口合恵宝袋・井戸堀位あらそひ」(1754宝暦4)「和漢咄会・屋根や」(1775安永4)	
44	通天犀	「正真咄大鑑・赤銅のめきき」(1687貞享4)「露休置土産・似と正真とハ各別」(1707宝永4)「かす市頓作・赤銅つば」(1707宝永4)「聞上手三篇・うにかうる」(1773安永2)「高笑ひ・赤銅」(1776安永5)「訳準笑話・客以通天犀角」(1824文政7)	宋・惠洪『冷齋夜話』 「禁蛇法」『笑府』「俗祭文」
45	自惚(久米仙人)	「軽口御前男・久米の仙」(1703元禄16)「春遊機嫌袋・初湯」(1775安永4)「和漢咄会」(1775安永4)「廓寿賀書・うぬぼれ」(1796寛政8)「流行咄安売3編・いかのぼり」(1826文政9)「はなしの新作・自惚のせんさく」(1864文久4)	

漢文笑話『訳準開口新語』について

作品番号	内 容	日本の類似作品	中国の類似作品・引用句など
4 6	守夜人	「百登瓢覃・番太郎」(1701元禄14)「軽口福蔵主・番太郎」(1713正徳3)「軽口はなしとり・ゆきよのひのやうじん」(1727享保12)「再成餅・火の用心」(1773安永2)「軽口五色幣・了簡ちがひ」(1774安永3)「新口花笑顔・町廻り」(1775安永4)「聞童子・夜廻り」(1775安永4)「新玉箒・火の用心」(1798寛政10)「花間笑語」(1800年前後) 落語「市助酒」	
4 7	医者 手遅れ	「民和新繁・野父医者」(1781安永10)	
4 8	影法師	「醒睡笑・廃忘」(1628寛永5)「聞上手三編・泥坊」(1773安永2)	『笑府』「世諱部・遇偷」
4 9	眼の薬	「聞上手二編・鼻の薬」(1773安永2)「近日貫・御通り」(1773安永2)「仕形咄・くすり」(1774安永3)	『孟子』「梁惠王章句上」 「不遠千里」
5 0	友人に傘を貸さない すべ(寝たふり)	「醒睡笑・廃忘」(1628寛永5)「聞童子・ねたり」(1775安永4)	
5 1	和尚と小僧	類似「今歳笑・子僧」(1778安永7)	王維「送元二使安西」 「勸君更尽一杯酒」
5 2	白のつき方	「沙石集・学生世間事無沙汰事」(鎌倉時代1283成立)「醒睡笑・艇」(1628寛永5) 落語「湯屋番」	
5 3	値踏みの癖	「醒睡笑・人はそだち」(1628寛永5)「きのふはけふの物語・下巻」(1636寛永13)「軽口へそ巡礼・直うちいけん」(1746延享3)「軽口浮瓢箒・千両の異見」(1751寛延4)「軽口東方朔・直段付」(1762宝暦12)「地口須天宝・三百両」(1773安永2)「軽口五色幣・女郎の直うち」(1774安永3)「茶のこもち・異見」(1774安永3)「春俗・物の直踏」(1777安永6)「笑の友・口合」(1801享和元)「百眼昔はなし・無間」(1844天保15)	
5 4	屁	「はつわらい・取はづし」(1788天明8)「胡盧百転・薄暮」(1797寛政9)	『笑府』「形体部・椅響」
5 5	章魚の脚	「笑の初り・たこ」(1792寛政4)	『淮南子』「天文訓」「青女」

作品番号	内 容	日本の類似作品	中国の類似作品・引用句など
56	薄粥	「訳準笑話・貧家」(1824文政7) 落語「くすぐり」	
57	水桶をひっくり返す	「醒睡笑・鈍副子」(1628寛永5)	
58	章魚の炙り	「きのふはけふの物語・下巻」(1636寛永13) 「訳準笑話・新井白石」(1824文政7)	
59	見越し入道	民話集「古今百物評判・第六・見越し入道 并和泉屋介太ら事」(1686貞享3) 「聞上手三編・見越」(1773安永2) 「軽口あられ酒・化ものにうハマへ取」(1705宝永2)	
60	異香	未見	
61	親子茶屋(息子の女装)	「友達ばなし・中の町」(1767明和4) 「腹筋問答・中の町」(1792寛政3) 「笑堂福聚」(1804 享和4) 落語「親子茶屋」	
62	武士の負け惜しみ	類話「寿寿葉羅井・牢人者」(1779安永8)	
63	聾	「福寿録・親父も息子も聾」(1708宝永5) 「口拍子・つんぼう」(1773安永2) 「富来話有智・聾」(1774安永3) 「初登・聾」(1780安永9) 「菊寿盃・つんぼ」(1782天明2)	
64	親子酒	「露休置土産・親子共に大上戸」(1707宝永4) 「坐笑産・親子生酔」(1773安永2) 「落話花之家抄・生酔」(1778安永7) 「福来すずめ・生酔」(1789天明9) 落語「親子酒」	『淮南子』「天文訓」「青女」
65	絵師	「露新軽口ばなし・絵心有人批難いふ」(1698元禄11) 「かす市頓作・絵かきの自慢」(1708宝永5) 「一のもり・芦鴈」(1775安永4) 「高笑ひ・絵師」(1776安永5) 「新落嚙初鯉・芦に鴈」(1777安永6) 「福種笑門松・絵師」(1790寛政2) 「訳準笑話・有好画鷺者」(1824文政7)	
66	勘違い	「新口花笑顔・ねこ」(1773安永2「吟咄川」の改題本) 「笑堂福聚」(1804文化1) 「訳準笑話・美婦人」(1824文政7)	

漢文笑話『訳準開口新語』について

作品番号	内 容	日本の類似作品	中国の類似作品・引用句など
6 7	乞食	「軽口笑ふくろ・ひにんばなし」(1720 前後享保) 「臍巡礼・乞食の身じまん」(1746 延享3) 「立春噺大集・非人の太平楽」(1776 安永5) 「さとすずめ・麻疹」(1777 安永6)	
6 8	生臭坊主	類話「醒睡笑・自墮落」(1628 寛永5)	
6 9	文盲	未見	辛棄疾「和前人観梅雪有懐見寄」「野鶴在鷄群」
7 0	鍋を買う	「気のくすり・鍋屋」(1779 安永8) 「解頤譚・売鍋」(1813 文化10)	『笑府』「日用部・売鍋」
7 1	壺算(狡猾な奴・馬鹿な店主)	「軽口瓢金苗上・算用合て銭たらず」(1747 延享4) 民話・落語「壺散用」	『笑林広記』「取金」
7 2	千手観音	能楽「田村」	
7 3	厲鬼相集(医者は藪)	類話「訳準笑話・路上」(1824 文政7)	類話『笑府』「方術部・願脚踢」
7 4	布団の奪い合い(本性)	未見	
7 5	乞食の自慢(債の取立てに休む閑がないものより乞食が楽)	「軽口へそ順礼・乞食の身じまん」(1746 延享3) 「立春噺大集・非人の太平楽」(1776 安永5) 「さとすずめ・麻疹」(1777 安永6) 「軽口笑ぶくろ・ひにんばなし」(享保頃)	
7 6	免官後の士君子(招かれざらば行かぬは君子の道)(窮酸気)	未見	
7 7	儒生と僧の問答(西方までの距離)	未見	
7 8	満腹(腹はちきれそうで乞食に代わりた)	「楽牽頭・大食」(1772 明和9) 「善謔随訳・有飽食者」(1775 安永4) 「蝶夫婦・大食の後悔」(1777 安永6) 「笑の友・およバざる」(1801 享和元)	
7 9	貸家札(疫鬼が空き家と思ひ近寄らぬよう戸口に貸間と貼る。)	「軽口福徳利・疫神の守」(1752 宝暦2) 「軽口東方朔・掛乞除」(1762 宝暦12)	

作品番号	内 容	日本の類似作品	中国の類似作品・引用句など
8 0	唾のふり	「はなし大全・欲の深い唾乞食」(1687貞享4) 「露新軽口ばなし・又いひさうな者」(1698元禄11) 落語「唾の釣」	
8 1	夫婦喧嘩(空想から喧嘩へ)	「無事志有意・欲しいもの帳」(1798寛政10)	『論語』「乗肥馬衣輕裘」
8 2	盗人の演習	「稚獅子・弟子入」(1774安永3) 「胡盧百転・懶」(1797寛政9)	『史記』「卷一百二十・汲鄭列傳」「門外可設雀羅」『晉書』卷八十「王羲之列傳・(徽之子)王獻之」 「偷兒, 青氈我家舊物, 可特置之。」
8 3	用心のし過ぎ(一目にて足る)	「はなし大全・耳ひろひ」(1687貞享4) 「軽口わかゑびす・よいたしなミ」(1742寛保2) 「飛談語・用意」(1773安永2) 「高笑ひ・膏葉」(1776安永5)	
8 4	燈油の注ぎ方(そそぎ方が下手なので口を拭けというと、まず拭いてそそぐ)	「訳準笑話・熟考」(1824文政7年)	
8 5	擬宝珠(金物を舐める)	「軽口御前男・鼻自慢」(1703元禄16) 「軽口はるの山・ねぶりずき」(1768明和5) 「聞上手・かなもの」(1773安永2) 「千里の翅・浅草五重の塔」(1773安永2) 「噺手本忠臣蔵・三段目」(1796寛政8) 落語「ぎぼし」	『論語』「郷党」「不撤薑食, 不多食」 『太平御覧』卷999「説苑曰文公好食昌本」
8 6	梅子酒(毒饅頭)	「沙石集・児の飴くひたる事」(鎌倉時代1283成立) 「口取肴・毒まんじう」(1818文化15) 「訳準笑話・和尚嗜鶏蛋酒」(1824文政7) 狂言「附子」	『啓顔録』
8 7	剣客と相撲取りのけんか	「軽口露がはなし・ひけう者の喧嘩」(1691元禄4) 「軽口御前男・出来合蔵」(1703元禄16) 「新話笑眉・かはつた相撲」(1712正徳2) 「軽口機嫌囊・芸あらしひ」(1728享保13) 「軽口独狂言・剣術者の方便」(1765明和2)	
8 8	物忘れ(自分を忘れる)	「楽牽頭・燈籠見物」(1772明和9) 「御伽噺・記憶」(1773安永2)	
8 9	理則一	未見	朱子『劉砥録』「理則一」

漢文笑話『訳準開口新語』について

作品番号	内 容	日本の類似作品	中国の類似作品・引用句など
9 0	反魂香（花柳界に身をやつした若者）	「傾城反魂香（人形浄瑠璃，近松門左衛門作）」（1708宝永5）「軽口蓬莱山・おもひの外のはんごんかう」（1733享保18）「解頤譚・反魂香」（1813文化10）落語「高尾」	東方朔『海内十洲記漢武帝内伝』『漢武返魂香』張応俞『杜騙新書』『陽台路隔，鵲橋難渡』
9 1	髪結い鬚奴の鬚を切り落とす（羹に懲りて膾を吹く）	「絵本軽口福笑」（1768明和5）	
9 2	三年坂	産寧坂で転ぶと，三年以内に死ぬという伝説	
9 3	借金の催促への返答	未見	『孟子』『万章章句』『洋洋焉，攸然而逝』『莊子』『外物』『轍中有鮒魚』『斗升之水』
9 4	狐との化かしあい	未見	『史記』『殷本紀』『臣聞妖不勝徳』『論語』『子罕』『匡人其如予何』『詩経』『有狐』『有狐綏綏』
9 5	大根を掘って井戸となす	「軽口御前男・御進物の大根」（1703元禄16）	
9 6	狐の恩返し（貧家にとっては口減らしは福）	未見	『史記』『呂不韋列伝』『奇貨可居』
9 7	泥棒（主人哀れみ金銭を与える。）	未見	
9 8	間男と裁き（反坐法を恐れた夫は姦婦を殺し，何事もなかったように振舞う。）	未見	『史記』『秦本紀』『大庶長弗忌，威壘三父廢太子而立出子為君』岡白駒『史記觸』『大庶長，威壘官名，弗忌，三父人名』
9 9	水争いと牛泥棒の解決（断案）	未見	
1 0 0	奴，劍の靈的光明にて巨蟒を退治する。	未見	『呉越春秋』『欧冶子』『韓詩外伝』『楚熊渠』『楊太真外伝』『斜谷之鈴』

以上は管見の及ぶ範囲で調査したものであり、遺漏も多いと思われるが、如上の作品を、作品と先行笑話との関係という視点から分類する（一部重複がある）と、おおよそ、1) 創作笑話²⁵、2) 日本笑話（民話・伝説なども含む）の漢文化、3) 中国笑話の翻案となる。

そのうち、1) 創作笑話は、その特徴から更に5分類できる。

A：中国人に仮託した話。（第1話「魏武」、第2話「華陀」、第98話「秦武公」など）、

B：中国書籍の語句を用いた話。（第17話「東坡詩」、第19話「易経」、第25話「荘子」、第49話「論語」、第51話「王維詩」、第81話「論語」、第89話「劉砥録」、第93話「孟子」「荘子」、第94話「詩経」「論語」「史記」、第98話「史記」など）

C：日本文化を反映する独自の短い話。（第3話、第5話、第8話、第9話、第10話、第14話、第15話、第21話、第24話、第29話、第30話、第31話、第33話、第34話、第38話、第40話、第41話、第43話、第47話、第55話、第56話、第60話、第61話、第62話、第66話、第69話、第72話、第74話、第76話、第77話、第78話、第79話、第82話、第84話、第88話など）

D：故事性の濃厚な長い話。（第96話、第97話、第98話、第99話、第100話など）

E：中国笑話と発想を同じくする話。（第6話、第22話、第27話、第42話、第54話など）

また、2) 日本笑話（民話・伝説なども含む）の漢文化については、以下のように二分できる。

A：先行笑話を漢文に直したもの。（第2話、第4話、第7話、第11話、第12話、第13話、第16話、第20話、第22話、第23話、第27話、第28話、第32話、第35話、第37話、第44話、第45話、第46話、第48話、第50話、第52話、第53話、第57話、第58話、第59話、第63話、第64話、第65話、第67話、第68話、第71話、第75話、第80話、第83話、第85話、第86話、第87話、第90話、第91話、第95話など）

B：先行の民話・伝説などを漢文に直したもの。（第26話、第27話、第28話、第35話、第36話、第59話、第86話、第92話など）

一方、3) 中国笑話の翻案と思われるものに、第18話、第44話、第48話、第54話、第70話、第73話がある。

以上の大まかな分類によって、従来言われていた、上記「漢文笑話なるものは…全然創作に成るといふ様なものは極めて少なく」という説は再考すべき点もあるのではないかと思われる。管見の及ばなかったところがあるとしても、『訳準開口新語』には笑話として初めて創作されたあるいはそれに近いものがかなりあるのである。それでは、そのような創作笑話には、具体的にいかなる特徴を見て取れるだろうか。

25 小論において、「創作笑話」とは、笑い話として初めて作品化された話という意味で用いる。

3. 2) 創作笑話の特徴

創作笑話の特徴の一つは、中国の古典に記された一句を用いて笑い話に仕立てるということである。その代表的なものを紹介する（下線部は古典から引用した部分）。

第19話

客曰、今之僧、外張清淨、内懷欲心、飲酒肉食、無所不至。主人曰、猶有甚焉、屬者詣一寺、見衆僧集食蓮根。客曰、此亡妨于清規。主人曰、不然、是剥牀以足也。其蔑佛亦甚矣。

第19話は、『剥牀以足』という、『易経』「剥」の一句を以って仏教に志すものの悪しき一面を風刺したものである。

第25話

瞽者行門中長弄、有犬為杖擿、號去。行數十步、又擿犬、瞽者大驚曰、犬之背不知其幾千里也。

ここでは、人口に膾炙している『莊子』「逍遙遊篇」の「不知其幾千里」を以って、瞽者が感じた犬の大きさを誇張して表現し、瞽者の負け惜しみを鮮やかに表現している。

第51話

客僧嗜醴、不欲與人、每於廁中飲。一日、僕外還、僧不在焉。幸其亡、欲竊飲。但恐僧還來、乃盛醴盃、亦如廁、僧先在歡矣。僕愕然、擎盃而曰、請更勸一盃。

これは、僧の留守にこっそり盗み酒をしようと厠に出向いた下僕が、厠で僧と鉢合わせをしてしまう。そこで、王維「送元二使安西」の一句「勸君更尽一杯酒」を借りて「更勸一盃」と酒を勧めてその場を誤魔化すという話である。

このような笑話は、笑話の中に古典の名句を盛り込んだ戯文性の強い作品といえよう。

こうした、名句の引用の他に、中国の古典の知識を用いて創作したものもある。第17話がよい例である。

第17話

有畏内者、妻性尤妒。夜半、聞東鄰獅子咆吼聲、細聽之、事起於朋淫。妒婦聞不平、技癢、乃張拳連擊其夫。夫大驚以為狂曰、妾非狂也、豫懲卿傲東鄰寄猥。

この話は、嫉妬深い妻の話であり、宋の蘇軾詩「寄吳德仁兼簡陳季常」を踏まえたものであろう。あるいは、明の王世貞が蘇軾の語を編次したといわれる²⁶「調謔編」の「獅子吼」²⁷の一話を目にして創作したのかもしれない。

26 王利器輯録『歴代笑話集』（上海古籍出版社、1981）所収。

27 宋・洪邁『容齋隨筆』「容齋三筆・卷三 陳季常」に「陳慥字季常、公弼之子、居於黃州之岐亭、自稱龍丘先生、又曰方山子。好賓客、喜蓄聲妓、然其妻柳氏絕凶妬、故東坡有詩云、龍丘居士亦可憐、談空說有夜不眠。忽聞河東獅子吼、拄杖落手心茫然。」と見える。

恐妻をテーマとした話はその後、幾つかの漢文笑話に引き継がれ、陳季常の恐妻振りを示す「獅吼」の語は広く知られるところとなる。例えば、『訳準笑話』（1824文政7）では、「有比鄰並懼內者，甲往訴乙曰，獅吼無耐奉盥薦寢，皆使我執役不亦甚乎。乙慨然激昂攘臂扼腕曰，唉，汝雖怯懦，何乃至此乎。若俾我為汝。言未畢，其妻隔障喝嗽。乙乃斂容曰，固亦謹奉役耳。」と見える。

以上、第17話、第19話、第25話、第51話の笑話に共通するのは、中国の詩文や經典などの一句を引用することによって文章が引き締められ、「落ち」が知的ユーモラスを伴うことにある。

もっとも、古典に典故を求め、それをを用いて笑話を創作する方法は、中国においても早い時期から存在した。例えば、宋の『笑苑千金』²⁸の「井有人焉」に「昔有人家有子，教以讀書。每出言，必舉書句。其父一日霜寒冰滑，失足落井。子見之曰，井有人焉。又見其父在水中沉沒，則曰，載沉載浮。及討得梯來救得。父出井，身寒戰慄，則又曰，吾不忍其殼觶。」とあり、『論語』「雍也篇」の「井有人焉」と『孟子』「梁惠王」の「吾不忍其觶觶」が折りはさまれ、面白い笑話を作り上げているなどである。

とはいえ、江戸期におけるこのような古典の引用は、話に収斂性をもたらすとともに、自らの才を披露するためのもので、日本における漢文笑話の大きな特徴の一つと言える。

そして、このような収斂性の高い笑話の作法は、従来日本にあった笑話を新たに漢文化する際に用いられたと同時に、その後の日本語による笑話（小咄や落とし話など）における話の収斂方法に大きく影響することになる。例えば、第16話にその影響をうかがうことができる。

第16話

毘盧殿兩楹有洞孔，大裁可容人。相傳能出入此孔者，獲出三塗。有一肥人率爾而入，牢而不能，努力久之，進退惟谷，乃大呼救人。眾人極力推之，方纔得出。乃謝衆，因泫然流涕曰，哀哀父母，生我劬勞。而今而後，知獨在母也。

ここで用いられているのは『詩経』「小雅 谷風之什 蓼莪」の一句である。話は極めて簡練である。一方、この話の元になったと思われる「詞葉の花」の話は、本来些か長いもので、遊女に逢いに行くため、こっそり抜け出そうと格子の棧を抜いてそこから出ようとしたが、なかなか脱け出ることができず、なんとかしてやっと出たところで、その奮闘の経験から母の生みの苦しみを思ったという「落ち」で締め括られる。この「詞葉の花」にヒントを得て『訳準開口新語』が作られ、その後、『訳準開口新語』の影響を受けて日本語による「聞上手」が作られていった。「聞上手」は、方広寺にある大仏の穴の開いた柱と結び付けて、次のように翻案する。

28 莊司格一・清水栄吉・志村良治著『中国の笑話 笑海叢珠 笑苑千金』（筑摩書房，1966）

「大仏殿の柱のあなを、後生の為とて皆くゝるなかに、ふとつたやつがくゞりかかつて見るに、肩斗出て、腰がつかへて、跡へも先へもいかず。大勢よつておし出せば、やうやうぬけいで、なミだをながし、これで母の恩をしりました。」²⁹

この一例から見ても、「聞上手」に与えた『訳準開口新語』の影響の大きさを知ることができる。漢文笑話のもつ簡練でエスプリのきいた作法をその後の日本語による「笑話」は大きく取り入れていったのである。

ついで、日本漢文笑話の創作の特徴として、当然のことながら日本の文化的背景が色濃く反映している作品が少なくない点を挙げよう。別の言葉で言えば、日本の文化的背景を知らなければ理解できない笑話もある、ということである。例えば、第60話である。

一少年私作風流巾。被父覺，父誠以煙花失身。少年給曰，大人無憂，此適拾之路上爾。父取，熟視之，曰，余之壯也，亦數拾矣。其美非此巾之所及。

この話は「風流巾」が廓通いのときに男性が被るものであることを知ることなくして、その面白みは理解できない話である。江戸時代、明暦（1655-1658）頃から編み笠をかぶって顔を隠しながら遊郭に通うのが遊客の流行になったといわれるが、このとき使用した編み笠が、『訳準開口新語』においては、「風流巾」と翻訳されているのである。息子の「風流巾」をみつけて戒める父に対し、「拾ったものだ」と偽る息子。しかし、実はこの父もまた若いときにこの「風流巾」を道端で拾ったと欺いて廓に通った人物であった。この親にしてこの子あり、である。

他にまた、日本漢文笑話の特徴として、そのジャンルが内包する内容の豊富さについても指摘しなければならない。『訳準開口新語』の第96話、第97話、第98話、第99話、第100話は比較的長い話で、笑話というよりは小説と呼ぶにふさわしい作品とってよい。例えば、第98話である。

秦武公大夫威壘，妻淫蕩，通姦于大庶長弗忌。威壘覺之，併殺姦夫姦婦。有司以聞。武公之為國也，網密刑嚴，乃親讞曰，疆暴男子，雖欲踰牆而摟處子，牆高藩固，雖欲從之，末由也已。原之，雖洽容誨淫乎。漫藏之責，其誰主之。禮法不行于家，如供職何。從今殺姦夫者，親夫亦反坐其罪。乃賜劍自裁。後侍臣張仲妻通姦于西鄰儀寧父。張仲略覺，而不敢窺執。一日，當夜入直，計是夜必姦夫踰東牆而摟伊婦。仍例整衣冠出門。還過東鄰，是同寮素所善者，談久之，忽佯腹痛暴發。因謂同寮曰，時限已至矣。不遑移上司，本府法嚴，足下所悉也。幸代下官入直。下官宿此養疾，且守爾家。同寮許諾，乃往。比及四更，張仲潛踰牆歸家，直入其室，果見寧父與妻同榻而臥。寧父見主人歸，愕然莫知所措。張仲屏氣，徐謂寧父曰，汝罪本當死于我刀下。唯是國有反坐法。我是以不敢殺汝。雖然，姦所執姦，情理難容。汝能斷而一指以

29 上掲の武藤禎夫・岡雅彦編『嘶本大系』所収に拠る。

謝我，吾怒亦足以解。乃事私下息矣。中菁醜聲，吾亦不欲彰聞也。寧父慨然自齒決小指，拜伏謝罪。乃放令歸。於是揜姦婦髮，而剝其腹，含之以姦夫指，仰臥屍榻上，如勒死狀，還復踰牆往同寮家。及天既曉，同寮罷直歸來，張仲稱謝而歸。入室佯大駭。急具狀訴。有司來檢驗，見屍口含指，先按問四鄰，西鄰喪指，不待鞠問伏誅。

この話は、妻の密通を目のあたりにした夫が、巧みな方法で妻と密夫を懲らしめるというもので、なおかつ故事性を備え、内容は理を説き、教訓を込めたものとなっている。この笑話には、『史記』からの引用もみられ、『史記綱10巻』を表した作者・岡白駒がその知識を織り込めて自らの文才を明らかにするために創作した作品と見ることもできる。このように強い物語性を持ち長文で記される話を笑話集の最後に配することは、後の『善謔隨詠』や『奇談新編』などにおいても見られ、日本における漢文笑話の一つの特徴となっている。これら物語性の強い長文の話は、往々にして、わずかな笑いの要素さえあればよいとする傾向にある。作者は、文章を記す上で何らの拘束もなく自由奔放に記せるという笑話のスタイルを利用して、漢文の才を顕示したものと見ることができる。

3.3) 中国笑話と『訳準開口新語』

『訳準開口新語』には、先行中国笑話類の影響を受けたと思われるものも少なくない。本来中国笑話の影響下に、日本の漢文笑話が生まれたのであるから、それは当然のことでもある。

例えば、第32話である。この話は元は、『藝文類聚』巻八十、『太平御覽』巻八百六十九、『太平廣記』巻二百五十八等に見え、後「笑林」に以下のように収められている³⁰。

某甲夜暴疾，命門人鑽火。其夜陰暝，不得火，催之急，門人忿然曰，君責人亦大無道理，今暗如漆，何以不把火照我。我當得覓鑽火具，然後易得耳。孔文舉聞之曰，責人當以其方也。やがて『訳準開口新語』第32話では、そのエッセンスが短文で次のように翻案されている。

第32話

主人夜外歸。將入室，蹙倒燭籠，大怒，數家人曰，汝輩暗裡置燈，使人唐突。

その後、この話は、日本語による笑話『千里の翅』や漢文笑話『訳準笑話』に引き継がれていく。『千里の翅』に、「長吉よ、用がある。早くこい——。「アイ」といふて駆出す拍子に、行灯へつゝかゝれば、灯蓋落ちてまつくらがり。親父腹を立て「いつでも——わがような鹿相な奴はない」と叱れば長吉ふくれづらして、「全体このやうな暗やみにおくが悪い」³¹とあり、『訳準笑話』には「主人夜醉而歸，蹙倒常明燈，蓋覆油飜，流離床席。大怒，譴家人曰，胡為暗裡置燈，使

30 王利器輯録『歷代笑話集』（上海古籍出版社，1981）所収。

31 武藤禎夫編『江戸小咄辞典』（東京堂出版，1979）に拠る。

人衝撞。」とある。その表現の簡約ぶりには『訳準開口新語』が大きく寄与していることを窺うことができる。

また、第70話は、宣伝文句で謳うところの精巧な鍋が、鍋売りが投げたとたん簡単に割れてしまうという話で、『笑府』では、それをうまく弁解する商人の知恵が笑いを誘う。『笑府』にヒントを得た『訳準開口新語』は、最初に値切った老婦人が「買わなくて良かった」とほくそ笑む内容に変化するが、そのおおよそは『笑府』に倣うとみてよい。

『笑府』

賣鍋者必以鍋底擲地作聲，以明無損。一人偶擲地而破，謂人曰，如此等鍋，就不賣與你了。³²

第70話

商客荷瓦器過門。主翁呼問買焙盆。商客出觀曰，此為最精好，價百文。翁夫妻估曰，不過三十文。商客艴然，不答而去。對鄰主人亦欲買焙盆，乃出觀，估欲買之二十文。商客大怒，投之擔中，破而為兩矣。向翁見之曰，呀，破矣。夫妻相目曰，幸不買之。

もっとも、第70話は『笑府』と比べるとやや説明的で些か精彩を欠く感を否めない。そのため、『訳準開口新語』の後に作られた「気の葉」に掲載された同類の話は、再びまた『笑府』の話の展開に軌道修正している。参考までにそれを掲げる。

『気の葉』

「私が鍋は請合つてあげます。これが御覧じませ」と、両方の耳を持つてなげて見せるに割れず。いくども投げて「これ、この通りでござる」といふ時、鍋さつと二つに割れる。「コレ、これをばあげませぬ」³³

3.4) 『訳準開口新語』の影響

『訳準開口新語』の江戸時代の笑話へ与えた影響が極めて大きいことは、先掲3.1)の表によってそのおおよそを知ることができよう。漢文笑話が江戸の小咄の隆盛を齎すきっかけになったといわれることも頷ける。

改めて、第66話を例にその影響の大きさを見てみよう。第66話は、他者のいう「美しい」ということが自分に与えられた評価であると勘違いするものであり、人間のもつうぬぼれ心理が垣間見られる笑話である。

第66話

有美婦人從一婢行。一男子目逆而送之曰，美而艷哉。婦人顧婢曰，渠說何。婢曰，非關夫

32 王利器輯録『歴代笑話集』(上海古籍出版社，1981)所収。

33 武藤禎夫編『江戸小咄辞典』(東京堂出版，1979)に拠る。

人之事矣。

この笑話は、やがて日本の笑話に翻案される。ここでは、『花笑顔』と『訳準笑話』及び『笑堂福聚』を取り上げる。

『花笑顔』³⁴

見世に美しいかみ様が、猫を抱いてゐるを、「ナント見やれ。とんだ美しい猫だナア」「ウン、あの猫を抱きたいな——」。猫、きいて「ニヤアンウハ」。女「べらぼう、うぬがこつちやねへ」。

『訳準笑話』³⁵

美婦人行。諸少年喝采曰、神耶、仙耶、殺人哉。婦顧從婢曰、彼輩説何。婢亦頗有色曰、非關娘子之事。

「笑堂福聚」³⁶

一婦人抱玉面猫、捲簾而立、風流艶冶、足以動人。二三少年過而品其標韻曰、白如雪、清如玉。猫鳴曰、喏。若應其言。然婦人纖指彈猫耳曰、總是不管汝也。

自らの美しさを称えられたものと勘違いしているのは、婢であったり（『訳準開口新語』、『訳準笑話』）、婦人であったり（『花笑顔』、『笑堂福聚』）と相違があるものの、『訳準開口新語』で創作された笑話の題材が、その後の作品に大きく影響を与えている様子を具体的に知ることができよう。

第41篇にも同様の影響が明確に見て取れる。日本において、達磨は面壁九年にて手足を失つたと伝えられ、縁起物としてのそれには早くから手足はなかったようだ。また、西域出身とも伝えられる達磨は、その名残か、イヤリングをしている姿が肖像画などに見える。このような日本人の達磨像を背景として次の笑話は創られた。

第41篇

或問曰、毎見畫達磨像、皆上半截、不知何義。曰、此九年面壁、腰足腐爛矣。問者曰、上半截。既得聞其義、敢問、兩耳貫環何也。曰、既亡足、不能行、其欲徙坐、則將以為鈕爾。

手足のない達磨には移動する術がない。しかし、耳輪があるじゃないか、耳輪は達磨にとって引っさげて動かしてもらうための「取っ手」だ、という極めて短い会話体のやり取りが展開されている。

独創によると思われるこの話は、その後『聞上手三篇』『菊寿杯』に継承されていく。

34 武藤 禎夫校注『安永期小咄本集—近世笑話集中』（岩波文庫、1987）

35 武藤 禎夫・岡雅彦編『噺本大系』（東京堂出版、1975）に拠る。

36 東北大学狩野文庫蔵に拠り、句読点を加えた。

『聞上手三篇』³⁷

「さる人、だるまのかけ地を見て、此だるまといふ人ハ、どの絵を見ても、腰から下ハない。どふしたものじやとふしんすれば、物しつた人が聞て、されバ、此だるま大師ハ九年面壁とて、九年が間座禪被成たによつて、尻がくさつてしまふたとき。それ故下をばかゝぬ。フウ、それなりや又、しりのない人がどふして居たもんだの。ヲ、サ。そのために耳にくわんを付たものさ。」

『菊寿杯』³⁸

「アノ達磨は手もなし、腰から下もなし。あれはどふして動くものだ」「アレカ。手もなし足もないによつて、耳にくわんが付けてある」

この他、先に取り上げた第25篇についても見てみよう。ここには、小咄本『楽牽頭』に与えた漢文笑話の例を見ることができる。『楽牽頭』には、『訳準開口新語』の落ちに用いた『莊子』の「不知其幾千里」の一句は引用されることはないが、笑いの落ちは十分に継承され、盲人の負け惜しみが記される。また、その短練な表現にも、漢文笑話の影響を読み取ることができる。今、第25篇と『楽牽頭』を再掲する。

瞽者行門中長弄，有犬為杖撻，號去。行數十步，又撻犬。瞽者大驚曰，犬之背不知其幾千里也。

『楽牽頭』³⁹

座頭、犬の足へ踏みかけければ、「わん」と鳴く。「おつと」「杖のほうへ」「あい」と言いながら、また犬の面へ踏みかけ、「わん」といふ。そばから、「この坊さんは、勘がない」「なに、犬が長い」。

『楽牽頭』「座頭」は、『訳準開口新語』の後に作られたもので、その影響を受け冗長な説明をもたず、引き締まった会話体となっているといえる。この後、漢文体笑話『解頤譚』、『訳準笑話』にも同類の話が収載されているが、「不知其幾千里」の句が再び用いられる。これらから、日本語笑話には『訳準開口新語』にみた簡練という特徴が、一方、漢文体笑話には「落ちに古典の一句を用いる」という特徴が継承されていったことを窺い得る。

『解頤譚』⁴⁰

瞽者將有所適，曳筇躡屐，得得然來。忽踏狗尾，狗吠狺狺。又行少許，筇接狗頭，狗亦吠。嘆曰，犬之長不知其幾千里也。

『訳準笑話』⁴¹

37 武藤禎夫・岡雅彦編『噺本大系』全二十巻（東京堂出版、1975）に拠る。

38 武藤禎夫編『江戸小咄辞典』（東京堂出版、1979）に拠る。

39 武藤禎夫校注『安永期小咄本集』（岩波文庫、2004）に拠る。

40 上掲『漢文体笑話ほん六種』に拠る。

41 上掲『噺本大系』第20巻に拠る。

客説劇話曰、瞽者造人家、行門中狹術、有犬為杖擗號去。行十數步、又擗犬、驚曰、犬之背、不知幾丈也。主人兒獨不笑悅、俯首沉思久之、忽若有所得曰、不肖熟考、此必是犬二頭。

3.5) 『訳準開口新語』創作の意図

それでは、『訳準開口新語』は、何を目的に作られたか。かつて、笑話に関心を抱いた、中国の周作人は『苦茶庵笑話選』⁴²の中で、中国笑話は、以下の点において意味をもつと記した。①道理を説くときの寓言として、②宴席などで、罰杯を免れるための冗談として、③（中国では滑稽小説の発展を見ることはなかったが）滑稽小説の萌芽的存在として、④（生活、風俗、好悪の感情など人々の自然な心の吐露が窺えることから）民俗学的資料として、という点である。

一方、『訳準開口新語』は、播磨清絢なる人物による序において「我以彼之文、而作文之要、莫譯是若焉。岡千里先生作《譯準新語》、意在斯乎…」と記すように、この書を作成した目的は「作文の要」のためであるという。『訳準開口新語』から、70余年後に編まれた『訳準笑話』においても、「採其簡短者、戲弄筆以消閒、冀為初學習文者、聊充譯準之資爾。」と記され、やはり「初学(者)が文を習う為」であると記す。しかし、それは、名目であったかもしれない。確かに、後半部は、物語性に富む長文によって初級から上級へと難度も高められ学習の総まとめ的色合いが出る構成になっていて、あたかも今日の学習問題集のようなスタイルを取っているが、この書には始めから初学者にしては割合難しい典故が散りばめられている。それゆえ、『訳準開口新語』及びその後の漢文笑話の多くは、中国の学問に通じた人々の戯文的色彩があったのではないか思わずにはいられない。漢文笑話の執筆は自らの才を発揮する機会でもあったのである。

『訳準開口新語』出版後、数十年を経て出版された『笑門』の序には、漢文笑話執筆の本音がはっきりと記される。『笑門』には、「夫學者博涉之暇、若有手把之則當足散卻其鬱情、是殆過虎溪而笑之類也。於是乎可謂詼笑益於學業矣。」とあり、その効用を漢文学習のためとは記さず、「當足散卻其鬱情（その鬱情を散却するに足るべし）」と認めた上で、「於是乎可謂詼笑益於學業（ここにおいて詼笑して學業を益すると謂うべし）」と記しているのである。笑いそのものが鬱情を散却するがゆえに學業を促進する、とこの一文には端的に記される。

『訳準開口新語』出版の後、宝暦2年（1752）には、宋の『笑海叢珠』、『笑苑千金』及び唐の『諧噓録』から採録された笑話集『鷄窓解頤』が、返り点、送り仮名、ルビなどを付して出版された。また、明和年間（1764-1772）には、『笑府』の抄訳三種が出版されている。『笑府』

42 周作人校訂『明清笑話集』（中華書局、2009）所収。

抄訳三種の出版は、日本の風土になじみやすいものを選び、日本では中国ほど深刻ではなかった腐敗官吏の風刺などを意図的に排除しての出版ではあった⁴³が、『訳準開口新語』によって引導された漢文笑話が、今度は本家中国笑話集『笑府』の翻訳出版という形でその後の日本文化の中に広く享受され、やがて小咄本、軽口本、落語の創作に、文体及び内容の面で少なからぬ影響を与えていったのである。

付記：小論を書くに当たり、本学部二村文人教授から資料面で多くのご指教を賜った。記して感謝を表したい。

43 松枝茂夫・武藤禎夫訳『中国笑話選』（平凡社、1964）解説の項参照。